

Ray Jackendoffの言語理論と言語習得

大岩 秀紀

Ray Jackendoff's Linguistic Theory and Language Acquisition

OIWA Hideki

Abstract

Ray Jackendoff is a leading linguist who has explored the status of meaning in the theory of grammar. In the 1970s he suggested the position of semantic interpretation in the generative grammar, contributing to its theoretical development. Since the 1980s he has devoted himself to the study of semantics and he has established a unique theory called Conceptual Semantics.

This paper consists of two parts. The first part traces the history of Jackendoff's linguistic models from the Extended Standard theory of generative grammar in the 1970s to his current tripartite model of language. The second part discusses the relationship of his current theory with the learning process of L2.

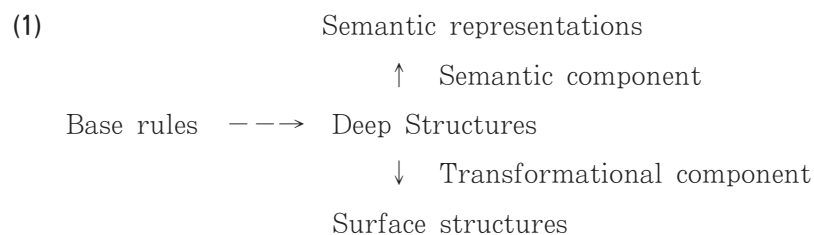
1. はじめに

Ray Jackendoffは言語理論における意味の位置づけを提唱してきた意味論学者である。1970年代においては、生成文法における意味解釈のあり方を提案し、生成文法の理論的發展に貢献した。80年代以降は意味論そのものへの傾倒を強め、90年代において「概念意味論」(Conceptual Semantics)と称する意味論を確立し、独自の言語モデルを築き上げている。本稿では、以下の第2節でJackendoffの言語モデルの変遷を辿り、第3節で彼の言語モデルと第二言語習得との関連を論じたい。

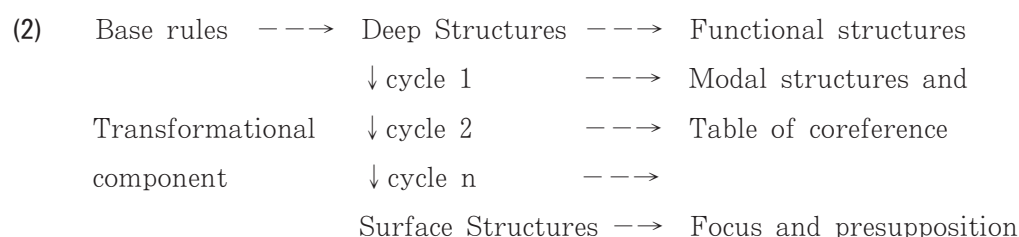
2. Jackendoffの言語モデル変遷

2. 1. 生成文法における貢献

Jackendoffの注目すべき最初の著作は、彼の博士論文をまとめた*Semantic Interpretation in Generative Grammar* (1972) であると言えよう。この著作では、生成文法理論における、それまでとは異なる意味論の位置づけが提案されている。標準理論と呼ばれたそれまでの理論では、意味は基底(深層)構造のみに関わるものとされ、したがって「変形は意味を変えない」というKatz-Postalの仮説が導かれた。(1)はKatz and Postalの提案を組み込んだ文法モデルである。(Jackendoff (1972: 4))



しかし、Jackendoff(1972: 4)は、深層構造と表層構造の両方に意味の異なった側面が関与する、(2)のようなモデルを提案した。このモデルでは、厳密下位範疇化や選択制限は深層構造で決定されるが、否定辞や数量子の作用域、焦点と前提、代名詞類、法助動詞解釈などは、表層構造でその意味が決定される。



このような言語モデルを仮定する利点として、Jackendoff は以下の3点を挙げている。第1に(1)の理論では英語文のすべてを生成する文法を規定できないが、(2)の理論ではそのような文法を含むことができるということ。第2に、(2)の理論では、従来は個別に扱われてきた規則や制約（例えば代名詞化や再帰代名詞化、補文主語の解釈）を有意義な形で一般化できるということ。そして第3に、(2)の理論は可能な文法類をより適切に制限しているということである。

この著作までの Jackendoff の考えは、生成文法の言語モデルにおいて中心となるのは深層・表層構造からなる統語構造であり、これら両統語レベルから意味が決定されるというものである。意味に関するこのような立場は「解釈意味論」と呼ばれていた。「解釈意味論」は、意味部門に生成的な役割を与え語彙分解や語彙挿入前の変形操作などを仮定する「生成意味論」と対立したが、その後の主流となる生成文法モデルでは「解釈意味論」が採用された。

さらに、Jackendoff (1972)では、「変形論的仮説」(Transformationalist Hypothesis)に対して提示された、「変形は派生形態論の操作を行わない」とするChomsky (1970)の「語彙論的仮説」(Lexicalist Hypothesis) をさらに推し進め、「拡大語彙論的仮説」(Extended Lexicalist Hypothesis) を提案している。この仮説は、変形は節点標示を変更することを許さず、同一性のもとで要素を削除することもできないとするものである。これにより、変形規則が語彙項目に対してできる変更は、数・性・格・人称・時制などの屈折接辞付加と、要素の移動・挿入・削除に限られる。このような変形規則に対する制限も、その後の生成文法理論の進展に一貫している流れであり、Jackendoff のこの著作は、この点においても理論の進展に貢献している。

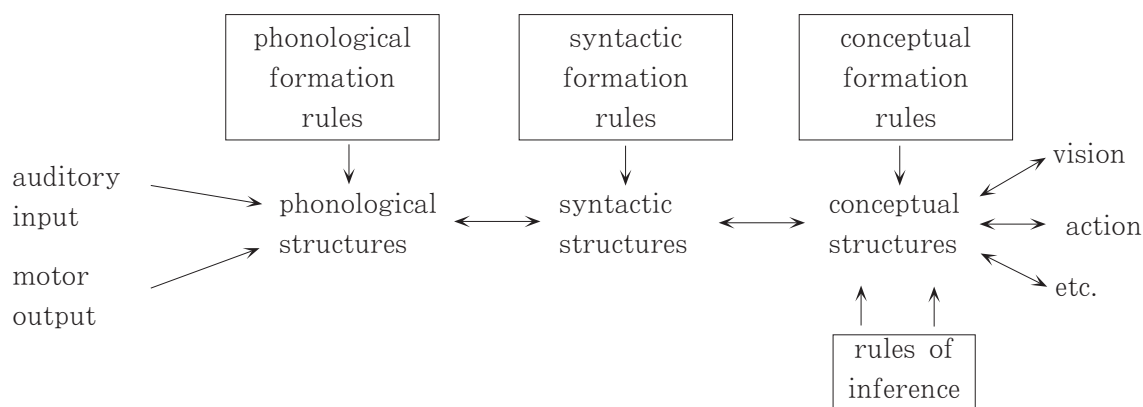
このように、70年代における Jackendoff は、「解釈意味論」と「変形規則の制限」という、その後の主流となる生成文法理論の考えを推し進める立場にあった。意味論との直接的関連はないが、もう一つ付け加えるとすれば、Jackendoffの著作*X'-Syntax* (1977) は、Chomsky (1970)で導入

された句構造規則の一般化を図る X'-schema を詳細に検討したものである。統語論の部門においても、主流となる生成文法理論の進展に貢献している。

2. 2. 意味論への傾倒

1980年代から1990年代前半にかけて、Jackendoff の関心は、意味に傾いていったようである。1983年に出版された *Semantics and Cognition* から、1990年の *Semantic Structures* に至るまで、各々のタイトルから分かるように、これらの著作では、人間の精神・認知体系に内在する意味・概念の有り様や、概念的意味と言語形式（統語構造）との対応関係を明らかにしようとしている。そして、自らが確立した意味論を「概念意味論」(Conceptual Semantics) と呼び、それを次のような文法モデルの中に位置づけている。Jackendoff (1983) と Jackendoff (1990) では提唱されているモデルが細部において異なるが、ここでは Jackendoff (1990) のモデルを示す。

(3) Jackendoff (1990:16)



Jackendoff が仮定する言語モデルは、音韻・統語・意味のそれぞれが自律した構造（音韻構造・統語構造・意味構造）を有し、それぞれには固有の原始的要素と組み合わせ原則がある。各構造は、適格な構造を生成する形成規則 (formation rules) によって記述される。さらに、この言語モデルは、各構造間を結びつける対応規則 (correspondence rules) を含んでいる。

この段階における Jackendoff の言語モデルにおける意味論の位置づけは、あくまでも Chomsky の生成文法理論における意味論を補完しようとするものであったと推察できる。このことは Jackendoff (1990) における以下のような言及から分かる。まず、第一に Chomsky (1986) で提示された I 言語 (I-Language) ・ E 言語 (E-Language) という区分に倣って、Jackendoff は I 意味論 (I-Semantics) ・ E 意味論 (E-Semantics) という区分を提唱している。そして、生成文法の目的が、I 言語、すなわち、話者によって内在化されている言語知識を構成する原則を解明することであると並行して、Jackendoff が提唱する概念意味論の目的は、I 意味論、すなわち話者に内在化されている意味理解や推論、真理判断を可能にする原則を解明することである。上記のモデルで説明するならば、「原理とパラメーターのアプローチ」と呼ばれた当時の生成文法理論で仮定されている諸下位理論が適格な統語構造を生成すると仮定されたのと同様に、概念意味論における概念構造と呼ばれる形式は、概念形成規則によって記述される、話者が世界の解釈をコード化する際の精神表示レベルであると仮定されて

いるのである。

Jackendoff (1990) に見られる概念意味論と生成文法理論とのもう一つの並行性は、X-bar Syntax と X-bar Semantics である。Jackendoff は、統語構造において N, V, A, P などの統語範疇が存在するように、概念構造においても Thing, Event, State, Action, Place, Path, Property といった概念構造上の範疇を想定する。そして、この両者に写像関係があると指摘している。例えば、"John ran toward the house." という文において、"John" と "the house" という名詞句 (NP) は概念範疇 Thing に相当し、"toward the house" という前置詞句 (PP) は概念範疇 Path に相当する。この文 (S) 全体は Event という概念範疇に対応する。また、ある統語要素が、別の統語要素を下位範疇化するように、概念範疇は関数・項構造 (function-argument structure) の形式へと分解される。例えば、"love" という語は統語範疇としては動詞 (V) に属し、主語と目的語の統語位置にそれぞれ名詞句を要求するが、それと並行して、動詞 "love" は State 関数をもつ概念範疇であり、2つの Thing 項をその概念構造上に要求するのである。前置詞 "from" は統語構造上その補部に名詞句を要求するのと並行して、概念構造上では Path 関数をもつ概念範疇であり、その補部に1つの Thing 項または Place 項を要求するのである。そこで、Jackendoff (1991:24) は、Chomsky (1970) 以来生成文法理論で仮定されてきた(4)のような統語的な句構造原則に対応する、(5)のような概念範疇の基本的な形成規則を提案する。

- (4) $XP \rightarrow \text{Spec} - X'$
 $X' \rightarrow X - \text{Comp}$
 $X \rightarrow [\pm N, \pm V]$

- (5) $[\text{Entity}] \rightarrow \left[\begin{array}{l} \text{Event/Thing/Place} \\ \text{Token/Type} \\ \text{F}(\langle \text{Entity}_1, \langle \text{Entity}_2, \langle \text{Entity}_3 \rangle \rangle) \end{array} \right]$

主要な統語句が主要な概念構成素に対応するという事実は(6)のような形式の対応規則として定式化される。(Jackendoff (1991:25))

- (6) $XP \text{ corresponds to } [\text{Entity}]$

これはさらに、統語構造上で下位範疇化、概念構造上で関数・項構造を記述した(7)のように記述される。

- (7) $\left[\begin{array}{l} X^0 \\ \text{_____} \langle \text{YP} \langle \text{ZP} \rangle \rangle \end{array} \right] \text{ corresponds to } \left[\begin{array}{l} \text{Entity} \\ \text{F}(\langle E_1 \rangle, \langle E_2 \rangle, \langle E_3 \rangle) \end{array} \right]$

YPはE₂に対応、ZPはE₃に対応、さらに主語(がある場合に)はE₁に対応する。

Jackendoff の概念意味論は、Langacker や Lakoffらによって提唱されている認知意味論・認知

文法とも一線を画している。Jackendoff は概念意味論が認知文法と、以下の4点において異なると述べている。第1の相違は、認知文法が自律したレベルとして統語表示を廃止しているのに対し、概念意味論はそれを認めていることである。第2に、概念意味論は、形式的な取り扱いこそが理論を検証可能なものにする最善の方法であることを根拠にして、出来るかぎり厳密なフォーマリズムに徹していることである。第3に、概念意味論は知覚心理学に関する成果と接するもので、その関係を暗黙のものとしていない、ということである。そして第4に、習得可能性の問題を探り、概念獲得のための生得的な形式的根拠の可能性に関与している点である。

この頃の生成文法は、「統率束縛理論」や「原理とパラメーターのアプローチ」と呼ばれ、その中で仮定された種々の下位理論（格理論、統率理論、束縛理論、 θ 理論など）の研究が注目を浴び、語や文の意味そのものは、生成文法のモデルの中ではあくまでも周辺的なものとして見なされるようになっていた。述語がもつ語彙特性に関しては、項構造 (argument structure) が、統語構造とのインターフェイスを成し、「動作主」や「主題」といった主題役 (θ -role) は語彙目録で指定されるが、生成文法モデルの中心となる統語派生の中では積極的に関与しない。また、文レベルにおける数量詞や疑問詞の作用域解釈はS構造から派生する論理形式 (Logical Form; LF) と呼ばれる統語構造表示レベルで扱われることとなった。

Jackendoff の概念意味論は、生成文法のモデルにおいて周辺的に扱われるようになった意味表示を補完しようとするものであると言えよう。例えば、述語がもつ意味特性には、原始的な意味関数と変項からなる語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) という意味表示が与えられ、「動作主」や「主題」といった主題役が、この表示の中で構造的に決定される。「主語」や「目的語」といった文法関係が統語構造の中で構造的に決定されるのと並行的に扱うわけである。したがって、主題役というのは統語論の一部ではなく自律した概念構造レベルの一部であり、生成文法理論が問題にする項構造というのは概念構造の一部を統語論に「見える」ように簡略化したものに過ぎないとJackendoff は主張する。例えば、動詞enterの語彙項目は、統語情報と意味情報が並列して表示される。

(Jackendoff (1991: 46))

$$(8) \left[\begin{array}{l} \text{enter} \\ \text{V} \\ \text{_____} \langle \text{NP}_j \rangle \\ \left[\text{Event GO}([\text{Thing} \quad], [\text{Path TO}([\text{Place IN}([\text{Thing} \quad])])]) \right] \end{array} \right]$$

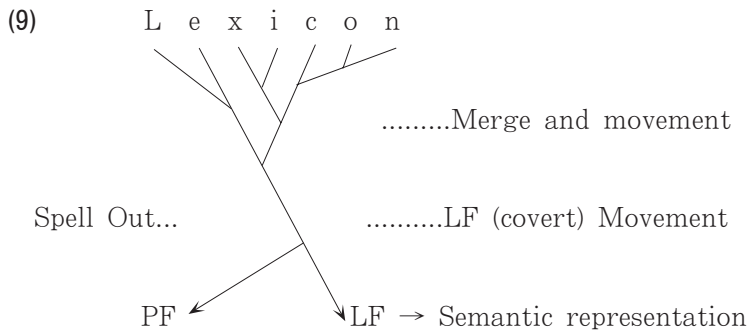
この語彙概念構造では、GO関数の第1項 $[\text{Thing} \quad]$ が「主題」という主題役を得る。第2項 $[\text{Path TO}([\text{Place IN}([\text{Thing} \quad])])]$ の部分が「経路」を表わす。「経路」項は、付与されているjというインデックスから分かる通り、統語構造においては目的語のNPと対応するのである。

2. 3. 生成文法からの乖離

1990年代後半から現在に至るまで、Jackendoffが自らの言語観を表明した主な著作としては、1997年に出版された*The Architecture of Language Faculty*、2002年の*Foundations of Language*、そして2005年のPeter W. Culicoverとの共著*Simpler Syntax*の3点が挙げられるだろう。これらの中

で、後年の著作ほど、生成文法理論とは異なった言語観をはっきりと表明している。

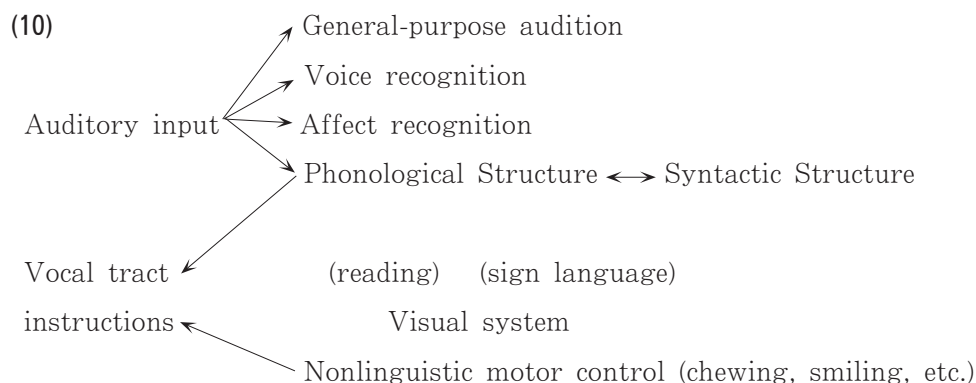
はじめにChomsky (1993, 1995) などで提唱された「極小主義プログラム」(Minimalist Program) について触れておこう。「極小主義プログラム」で仮定されている言語モデルは、以下のようなものである。(Jackendoff (2002:110))



ここで、計算体系とされる言語は、概念的必要物として、①調音・知覚体系 (PF)、②概念・意図体系 (LF)、③語彙 (Lexicon) とのインターフェイスをもたなければならない。しかし、Jackendoff は Chomsky がこれを規定する際に、概念的に不必要と思われるいくつかの仮定をしていると言う。第1の仮定は、計算体系は所与の形式を変更する「派生」操作を行うということである。第2に、計算体系は1つの句構造を別のものに置き換えるという「代入」操作（極小主義プログラムでは "Select" と "Merge" と呼ばれる操作）を行うという（間接的な）仮定していること。第3に、語彙のインターフェイスは統語派生の初期段階に位置すると仮定されていることである。また、これに付随する第4の仮定として、語彙挿入や "Merge" の操作はX₀範疇であるN, V, A, Pを句構造に入れるということが前提とされている。さらに、言語機能が「非余剰的」であるとの仮定の上に生成文法の作業仮説は成り立っていることを、Chomsky (1993) 自身の言葉を引用して示している。これらの様々な仮定とともに、統語部門こそが言語の computational system である言語の生成を担う中心で、音韻・意味部門は解釈的であるとする「統語中心主義」(syntactocentrism) と呼ぶべき言語観が Chomsky の生成文法理論に一貫してきた仮定であると、Jackendoffは指摘する。

これに対し Jackendoff は、1995年以降の著作において徐々に、これら生成文法が前提としている仮説に異議を唱えている。Jackendoff(1995) では、離散無限性 (discrete infinity) の源は統語論だけにあるのではなく、(3)と同様の、自律した音韻・統語・意味の3部門がそれぞれ離散無限性の源であり、この各部門を生成文法と呼ぶべきであり、文の構造記述はこれら3部門の構造間の対応を確立させることから生じると主張している。Jackendoff(2002:107) では、"I have come to believe that this 'syntactocentric' architecture was an important mistake—perhaps historically unavoidable, but a mistake nevertheless." と述べるにまで至っている。

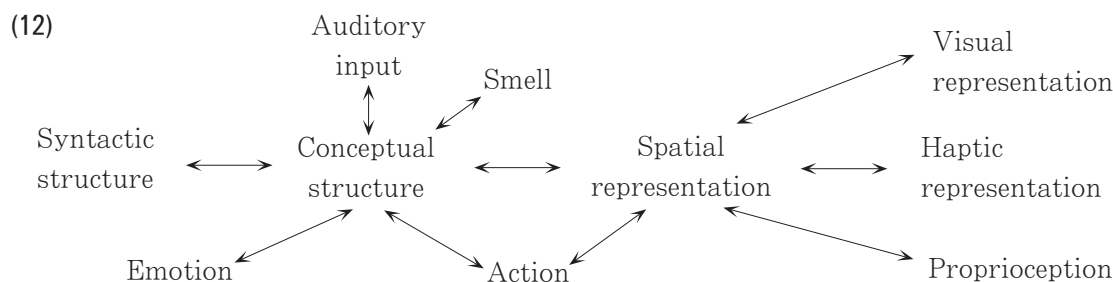
では、Jackendoff の言語モデルでは、言語の産出・知覚・理解が、それとどのように関わっているのだろうか。言語産出 (speech production) とは、脳内の音韻構造が声道操作を行う運動野に指令を与えるプロセスと解釈できる。一方、発声知覚 (speech perception) は、聞こえた言語音を解析し、音韻形式へ変換するプロセスである。したがって、聴覚シグナルと運動シグナルを対応させ、統一された「調音・知覚」体系を構成できるのは、音韻表示という抽象レベルにおいてである。聴覚的なインプットと言語産出に関わるモジュールは次のように図示されている。(Jackendoff (1997: 43))



概念・意図体系のインターフェイスには概念構造が仮定される。これまでの Jackendoff の著作で提案されてきたものを踏襲し、概念構造は物体、事象、属性など概念化された構成要素から成り、それらは統語論における階層的構造を反映すると仮定されている。例えば、統語論における統語範疇は、概念構造における以下のような存在範疇に対応する。(Jackendoff 1997: 34)

- (11) N: Object (*dog*), Situation (*concert*), Place (*region*), Time (*Tuesday*), etc.
 V: Situation (Events and States)
 A: Property
 P: Place (*in the house*), Time (*on Tuesday*), Property (*in luck*)
 Adv: Manner (*quickly*), Attitude (*fortunately*), Modality (*probably*)

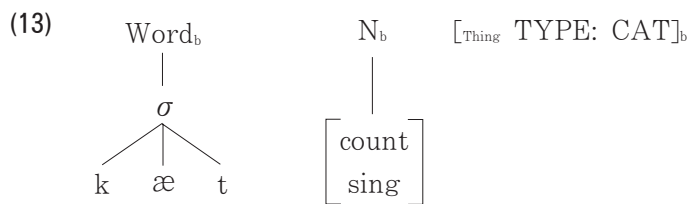
概念構造は、空間認知をはじめとして、言語外のさまざまな感覚様相とインターフェイスを成すと考えられ、次のようなモジュールで示される。(Jackendoff 1997: 44)



文法モデルを広範囲な精神機構仮説へと当てはめるこのような見方を、Jackendoff は、Representational Modularityと呼んでいる。

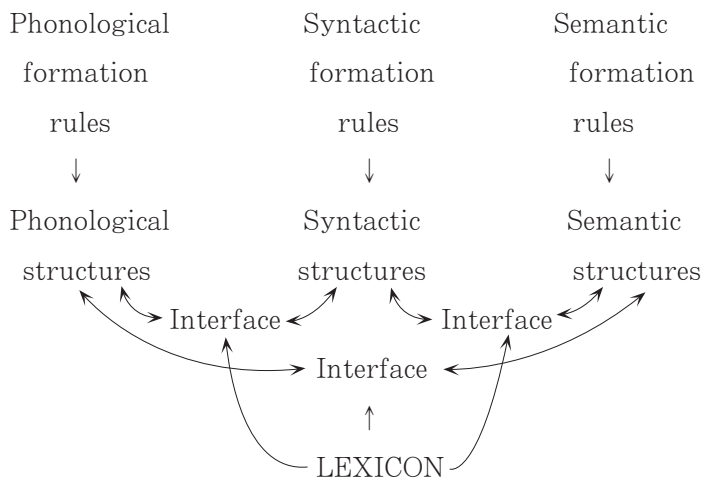
この観点に立てば、先に述べた生成文法の語彙挿入に関する第3・第4の仮定も再考を要する。このようなモジュール的表示方法を採用すると、語彙挿入 (lexical insertion) という規則は存在しないと Jackendoff は主張する。Chomsky の生成文法では、標準理論から極小主義プログラムに至るまで一貫して、語彙 (the lexicon) を統語派生の出発点に位置づけていた。そして、語彙が持つ音韻・意味情報は派生の後の段階で解釈されるものとされてきた。しかし、Jackendoff はそもそも、語彙項目というものは音韻・統語・意味素性が1つの構造<PS, SS, CS>として長期記憶に蓄えられてい

るものと規定する。語彙挿入という操作があるとするならば、語彙項目はそれ全体として統語構造に挿入され、その中に含まれる音韻・意味構造は、それぞれ適切な音韻・概念構造のインターフェイスにたどり着くまで関与しないことになる。この考えに対し、Jackendoff は、語彙項目の一つ一つを対応規則 (correspondence rule) と見なし、語彙目録全体を、PS-SS/SS-CS 間のインターフェイスモジュールと見なしている。語彙項目というのは、統語派生へと挿入されるものではなく、統語構造の末端 (に近い) 記号列と音韻・概念構造との対応を認可するものと考えられる。したがって、Jackendoff は、語彙に関わるこの操作を、語彙挿入の代わりに、「語彙認可」 (lexical licensing) と呼んでいる。例えば、英語における "cat" という語彙項目は、次のような小規模の対応規則と考えることができる。(Jackendoff (1997: 89))



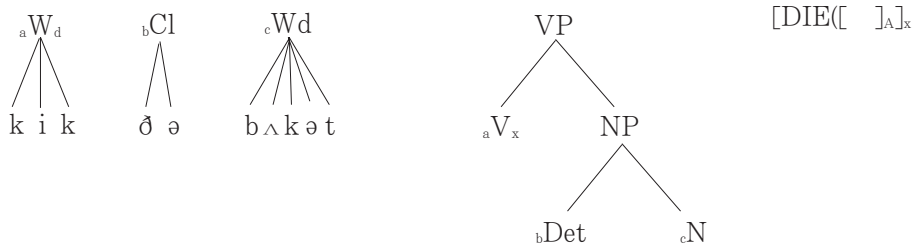
このような語彙の位置づけは、先の(3)で示した Jackendoff が "the parallel architecture" と呼ぶ言語モデル内で、次のように示される。(Culicover & Jackendoff (2005:18))

(14) The parallel architecture



そもそも人間が語彙として長期記憶に蓄積するものには、どのようなものがあるのだろうか。Jackendoff (1997)・Jackendoff (2002)・Culicover & Jackendoff (2005) は、Lexicon に蓄えられる語彙項目というのは、必ずしも X_0 範疇に属するいわゆる「単語」と通例我々が呼ぶものに限らないと繰り返し述べている。それぞれの言語に存在する X_0 より小さい語幹や接辞なども Lexicon に蓄えられているであろうし、また逆に、イディオムなどの単語より大きな単位の固定表現も Lexicon に存在する。例えば、英語における "kick the bucket" というイディオムは、(13)の *cat* と同様、次のような対応規則と見なすことができる。(Jackendoff (1997:169))

(15) kick the bucket



イディオムの中には、(16)のように、直接目的語がイディオムを構成する2つの要素の間に介入する不連続のものもある。(Jackendoff (2002: 168))

(16) take NP to task (NPをしかる・とがめる)

take NP for granted (NPを当然のことと思う)

show NP the door (NPを追い出す)

give NP the boot (NPを解雇する)

give NP a piece of *pro*'s mind (NPにずけずけ文句を言う)

put NP_i in *pro*'s place (NPに身のほどを思い知らせる)

さらに、次のような文レベルのものも一種の固定表現として、長期記憶に蓄えられている。(Jackendoff (2002: 169))

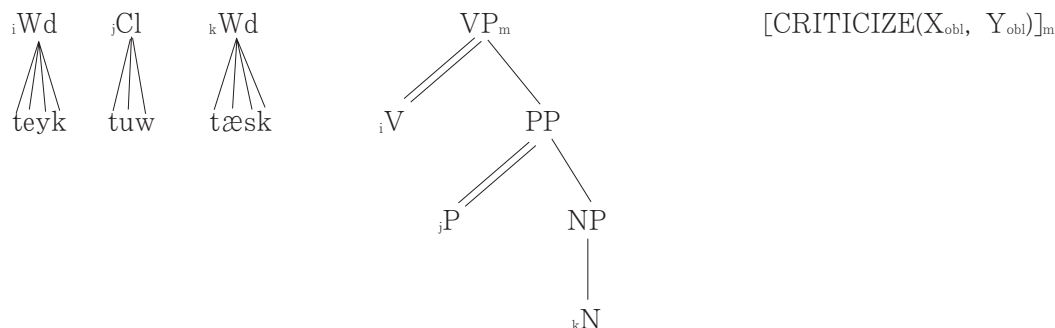
(17) a. The jig is up (万事休す。もうだめだ。)

b. That's the way the cookie crumbles. (世の中そんなものだ。)

c. The cat's got NP's tongue. (口がきけなくなる。)

ここで、"take NP to task"を例として、その語彙表示を示す。(Jackendoff (2002: 170))

(18) take NP to task



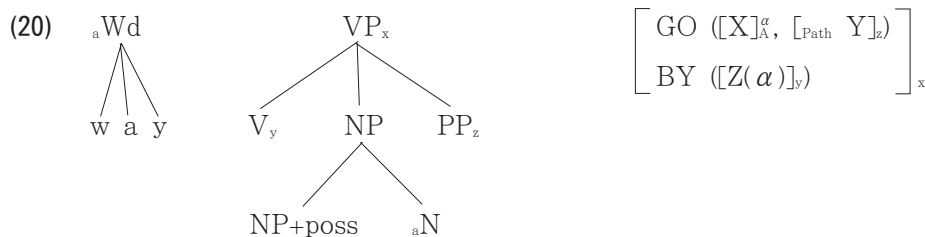
音韻構造と統語構造はi, j, kのインデックスから分かるように規則的に対応しているが、統語構造と概念構造の対応は不規則である。概念構造のY項は、統語構造上目的語名詞句に写像する。したがって、この統語構造上ではVとPPの間にNPとして具現しなければならない。音韻構造上においても、

Y項が表わす概念に対応する音韻要素が/teyk/と/tuw/の間に生じることになる。すなわち、この語彙表示においてはY項に対応する音韻・統語要素はオープンなのである。

このように、音韻・統語・概念構造の3つの要素が完全に揃っていない表現も、長期記憶として蓄えられているという考えを推し進めると、いわゆる「構文」も同様に表示できる。次に挙げるのはway構文 (way-construction) と呼ばれるものである。(Jackendoff (2002: 174))

- (19) a. Bill belched his way out of the restaurant.
 b. Frank drank his way across the country.
 c. Sue sang her way through dinner.
 d. Sosa and McGwire have homered their way into the hearts of America.
 e. Chew your way to a cleaner, fresher mouth. [ad for gum]

これらの文に共通しているのは、①統語的には*one's way*という固定されたNPと自由なVとPPを持っていること、②意味的には、動詞で表わされる動作を行いながらまたは行うことによってPPで表わされる経路を（物理的または比喩的に）移動する('traverse the path PP while/by doing V')ということである。これも、Jackendoffは一種のイディオムと見なし、次のような対応をなしていると考えられる。(Jackendoff (1997:172))



さらに、語彙的には一切固定されない自由変項だけからなる構造も、同様の対応規則と見なすことができる。これは、Goldberg (1995)らによって提唱されている「構文イディオム」(constructional idiom)と同じ考えである。以下に示す(21)の例文は、「結果構文」(resultative construction)と呼ばれるもので、統語的には動詞が主要部となっているが、動詞の意味は結果状態を引き起こすための様態を表わし、意味的な主要部となっていない。(Jackendoff (1997: 171))

- (21) a. The gardener watered the tulips flat. ('the gardener caused the tulips to become flat by watering them')
 b. We cooked the meat black. ('we caused the meat to become black by cooking it')
 c. The professor talked us into a stupor. ('the professor caused us to go into a stupor by talking')
 d. He talked himself hoarse. ('he caused himself to become hoarse by talking')

これらの文は、固定された音韻構造は欠如しているが、次のような統語構造と意味構造を対として持つ

ている。(Jackendoff (1997:171))

(22) $[V_P V NP PP/AP]$: 'cause NP to go PP/to become AP, by V-ing (NP)'

このような way 構文や結果構文の分析から、Jackendoff (2002:176)は構文を、「レキシコン」内で新たに項構造を作り出す語彙規則として見なすのではなく、むしろ、それ自身が動詞と自由に組み合わせられる語彙項目として見なしている。動詞がその動詞句の統語的項構造を決定するのではなく、構文自体が動詞句の統語的項構造を決定すると考えるのである。このような見方は、従来から派生的なアプローチを取ってきた生成文法の考え方とは相容れない。

Jackendoff (2002:180)は、結果構文とは音韻論を欠く「不完全な」(defective) 構文であると見なす。ここからさらに音韻構造と意味構造の両方を欠く「二重に不完全な」(doubly defective) 構文というのは、つまるところ従来から伝統的に文法の規則とされた「句構造規則」になることを示唆している。

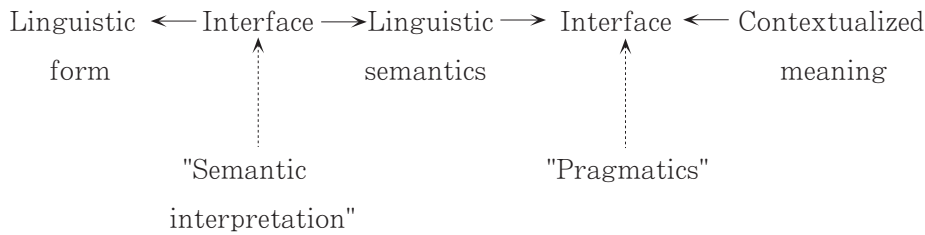
(23) $S \rightarrow NP VP$
 $NP \rightarrow Det N$
 $VP \rightarrow V NP PP/AP/Prt$

ここに至って、Jackendoff は、語彙項目と伝統的な文法規則との間に明確な境界線がないと論じ、このように語彙項目と文法規則を連続体として捉えることが、子どもの言語習得の実体に合致しているという。Jackendoff (2002:188-189) は次のように説明している。具体的な個々の語彙項目が蓄えられていくと同時に、さまざまな構文のような変数をもつパターンが発達していく。蓄えられた項目間の関係が、やがて生産的になる (*goes productive*) と、このパターンがタイプつき変数を満たす他の語彙項目と自由に組み合わせることを可能にし、新しい組み合わせをもはや蓄積する必要がなくなる。習得に関わるアプローチは言語のどのスケール—音節構造、形態論、句構造、イディオム、構文—においても適用される。規則の学習と語彙の学習は同じ処理によって行われるのである。

Chomsky (1981) 以降、生成文法では文法自体を「核」(core) と「周辺」(periphery) に区分してきた。「核」となる規則は言語の規則性を表わし、パラメーターの設定によって支配されていると考え、他方、「周辺」的文法は有標的な例外を表わし、規則性のない現象(ある種の構文や不規則動詞など)として処理されたのである。しかし、Culicover and Jackendoff (2005)は、この点においても全く異なる考え方を表明している。ちょうど語彙と文法規則が連続体を成すように、「核」となる文法現象と「周辺」的文法現象とも連続体を成すと考えるのである。

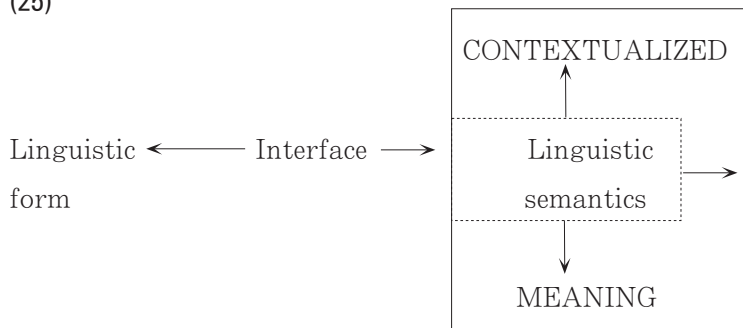
最後に、90年代後半以降の著作における Jackendoff の意味論の位置づけについて見てみよう。生成文法やその他の言語理論では、言語的な意味論の部分と非言語的知識・思考、文脈的意味とが区分されうるものと考えられてきた。すなわち、語彙項目の「辞書」的意味と「百科事典」的意味とは区分されなければならない、前者のみが言語意味論の視野に入るものとされていたのである。このような意味論の考え方は、次のようなモデルで示されている。(Jackendoff (2002:282))

(24)



これに対し、Jackendoff は言語意味論の領域が人間の概念化と連続しているものとして考えなければならないと主張している。言語意味論は、文脈化された意味の部分集合であると考えるのである。(Jackendoff (2002:283))

(25)



このように、90年代後半以降の Jackendoff の言語モデルは、標準理論から極小プログラムに至るまでの主流の生成文法が取ってきた仮定に対し、明確に異論を唱えるようになったことが分かる。詳細は省略するが、Culicover and Jackendoff (2005) では、生成文法が仮定している二項枝分かれ (binary branching) に対し、平板構造 (flat structure) を認めている。また、生成文法では構造的に決定される主語や目的語といった文法機能を、「文法機能層」(grammatical function tier; GF-tier) と呼ばれる階層と規範的統語位置との写像によって決定されるものと見なしている。

3. 第二言語習得における語彙と文法

Jackendoff は、自身の著作の中で第二言語習得と自らの言語モデルとの関係について言及はしていない。第二言語の習得過程が、母語の影響や干渉を受けるという点で母語の習得過程とは異なることは知られている。しかし、そもそも母語であれ第二言語であれ、人間が言語を習得することは言語の何を獲得するのだろうか。もちろん、当該言語の音韻・統語・意味の構造を獲得するのである。第二言語習得の場合、その言語体系を構築する際に、すでに獲得している第一言語の影響を多かれ少なかれ受けるということは事実である。そこで、この節では、Jackendoff の言語モデルを、第二言語習得の過程に照らし合わせて考えてみたい。第二言語習得に関する理論とそれに基づく外国語の学習方法はさまざまあるが、ここでは、日本語の母語話者が、非母語である英語を学んでいく過程で実際に何が行われているかを例にとって見てみることにする。

ほとんどの日本人は、文部科学省の定める学習指導要領に従って、中学校から外国語として英語を履修する。中学校での学習は、言語活動として4技能（聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと）

を基本とした上で、コミュニケーションを図る活動を行うことに配慮するよう求められている。とりわけ、あいさつや家庭生活などの言語使用場面と、情報伝達・意思表示・感情といった言語の働きが英語学習の中で取り上げられるように要求されている。

これらの言語活動を達成させるための言語材料は①音声、②文字・符号、③語・連語、慣用表現、④文法事項に区分して表記されている。①音声では、発音、音変化（語と語の連結など）、語・句・文レベルの強勢、文レベルのイントネーション、区切りが指導項目に挙げられている。③の中では、季節・月・曜日・時間・天気・数（序数を含む）・家族などの日常生活にかかわる基本的な語を含む90語程度の語を習得することが記載されている。この中で、冠詞・代名詞・前置詞・助動詞・接続詞などの機能語を中心とした基礎語彙は別表に示されている。また、慣用表現として挙げられているのは、"excuse me", "I see", "I'm sorry", "thank you", "you're welcome", "for example"などである。④の文法事項では、文の種類（単文、重文、複文、肯定・否定の平叙文・命令文、疑問文）、句型（五文型の基本的なもの）、代名詞、動詞の時制など（現在形・過去形・現在進行形・過去進行形・助動詞を用いた未来表現）、形容詞・副詞の比較変化、to不定詞と動名詞の基本、現在分詞・過去分詞の形容詞的用法、現在形・過去形の受動態が指定されている。

このように中学校レベルの英語学習においては、限られた語彙・句型・文法・固定表現を用いることで、日常生活に根ざした英語によるコミュニケーション活動が可能になるようにデザインされている。教授法としては、母語に一切頼らないで教える方法もあれば、母語である日本語を介して教える方法もある。実際の中学校の教育現場では、後者の方法によって教授されていることが多いであろう。いずれの方法で学習するにせよ、日本で英語を学ぶ中学生の多くは日本語の言語体系をすでにその脳の中に確立しているので、その学習過程において母語とのマッチングは避けて通れない。

例えば語彙の習得からみてみよう。「犬」="dog"ということを知得するということは、/inu/という音韻連鎖で表わされる概念を、英語の/dog/という音韻連鎖で表わされる概念と同定するという事に他ならない。

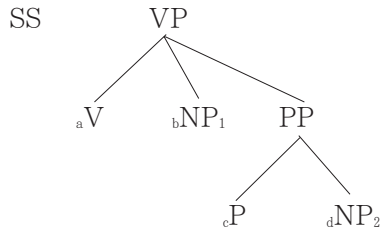
(26)	PS	SS	CS
"dog"	/dɔg/	N	DOG
「犬」	/inu/	N	DOG

固定表現の場合も、この同定は比較的単純である。英語と日本語で異なった音韻連鎖をもつものが同一の概念を表わすということだけを知ればよい。統語構造はないわけではないが、このような表現の場合、defective と考えても問題はない。

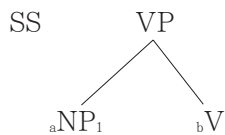
(27)	PS	SS	CS
"good morning"	/gud mɔ:nɪŋ /	(Adj N)	greeting in the morning
「おはよう (ございます)」	/ohayou (gozaimasu)/	(Adj (V))	greeting in the morning

変項を含んだイディオムの場合、両言語の変項要素がどこに対応しているかを知る必要がある。英語の "take ~ into consideration" を例にとってみよう。これは、日本語の「～を考慮する」という表現に対応するので、両言語の目的語が変項となっている。この英語イディオムに相当する日本語の表現は「～を考慮する」という音韻連鎖以外にも考えられるが、ここでは便宜上この訳語のみ提示する。また、両言語のCSも同一表示しておく。

(28) "take ~ into consideration"

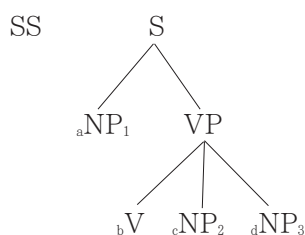
PS _a/teik/ [_b[] _c/intə / _d/kənsidə'reɪfən /CS [X CAUSE [Y₁ GO [INTO CONSIDERATION₂]]]

「～を考慮する」

PS _a[phrase]-o _b/kouryosuru/CS [X CAUSE [Y₁ GO [INTO CONSIDERATION]]]

外国語の学習には、単語のみならずこのようなイディオム単位の習得もかなりの比重を占めていることを忘れてはならない。習得対象言語における2語以上からなる連続（あるいは不連続）構成素によって表わされる概念が、同一概念を表わす母語の表現に相当する場合、その構成素を全体としてマッチングさせるのである。

文法の場合はどうであろうか。中学校の学習指導要領の中に含まれている、いわゆる第4文型（S+V+O+O）を例にとってみよう。直接目的語要素として生ずるものは、名詞・代名詞の場合とhow（など）to不定詞の場合とに区別されている。このような文型のスキーマは具体的な音声要素はもたないが、統語構造と概念構造をもつ「構文」と捉えることができる。

(29) PS _a[phrase] _b[phrase] _c[phrase] _d[phrase]CS [x₁ CAUSE [z₂ BE WITH y₃]]

日本語では格助詞が音韻的に具現化された次のような構文として示すことができるだろう。日本語の場合、各名詞句の語順を自由にかきまぜることができるが、ここでは以下の語順で示すことにする。

(30) PS

_a[phrase]-ga _b[phrase]-ni _c[phrase]-o _d[phrase]



実際の教育現場では、このように対応する日本語と英語の二重目的語構文のスキーマだけを提示して教えられることはもちろんない。次のような具体的な例文を提示することによって教授される。

(31) a. John gave Mary a book. (ジョンがメアリーに本をあげた。)

b. I sent her a letter. (僕は彼女に手紙を送った。)

要するに、(31)のような主語・目的語・動詞に具体的な語彙を含んだ英文の形式が、日本語の「～が～に～をあげる・送る」という授与表現に相当することを教え、そこから抽出されたパターン（スキーマ）を他の例に適用していくという習得過程が見られる。場合によっては、与格構文（S+V+O+to/for O）という別の文型との関連も教授されることがあるが、この場合ももちろん具体的語彙を含んだ例文によるマッチングから構文レベルでのパターンのマッチングという手順が取られるだろう。

以上のように、語彙や固定表現、構文のそれぞれの概念構造が日英語において近似している場合は、それらをマッチングさせることによって比較的容易に習得することが可能であるが、語彙・構文いずれのレベルにおいても、両言語において1対1の対応を成すことはまれである。特に多義語の場合、1つの意味において両言語間で共通しているとしても、他の語義において重ならない場合が多い。Jackendoff(2002:341)は、"smoke" という単語を例に挙げている。

(32) a. smoke₁ = 'wispy substance'

b. X smoke₂ = 'X gives off smoke₁'

c. Y smoke₃X = 'Y causes X to smoke₂, where X is a pipe, cigar, etc., by putting in the mouth and puffing, taking smoke₁ into the mouth, etc.'

d. Y smoke₄ = 'Y smoke₃ something'

e. Y smoke₅ X = 'Y causes smoke₁ to go into X, where X is a ham, herring, etc., by hanging X over a fire in an enclosure'

英語ではこれらすべて、"smoke" という同一の形態で表わされるが、ドイツ語では(32a)のsmoke₁

はRauch、(32b-d)のsmoke₂₋₄はrauchen、(32e)のsmoke₅はräuchernと形態的に区別される。日本語も然りである。(32a)は「煙」、(32b)は「煙を出す」、(32c-d)は「吸う」・「喫煙する」、(32e)は「燻製にする」というふうに表現される。これらの意義はすべて関連づけられているが、言語使用者は個々に学習する必要があると、Jackendoffは述べている。英語を外国語として学習する場合も同じである。

英語動詞"run"は、日本語動詞「走る」がもつ概念的意味と同義であるが、必ずしも「走る」という音韻連鎖に置き換えることはできない。

- (33) a. Your nose is **running**. (鼻水が**出**ている。)
 b. The engine doesn't **run** properly. (エンジンがちゃんと**動**かない。)
 c. He **runs** a restaurant. (彼はレストランを**経**営している。)

英語動詞runのような意味的に関連した複数の語義をもつ多義語に対し、学習者用の英和辞典は、それぞれに相当する日本語訳を複数与える。学習者はそれぞれの訳語を覚えなければならない。しかし、近年では田中・武田・川出(2007)など、複数の語義に共通する「コア(lexical core / core meaning)」を図式または記述で表示する辞書も出ている。

外国語学習の困難の1つはまさにこのような多義語のミスマッチにある。このミスマッチは語彙レベルだけではなく、構文レベルにも起こりうる。先にあげた授与表現が、英語ではいわゆる二重目的語構文・与格構文のいずれでも表わされることもその一例と言える。

4. 結

以上、本稿では Jackendoff の言語モデルの変遷を辿った上で、彼の現在の言語観を概説し、それが外国語学習のあり様と理論面でどのように関連づけられるかについて示唆した。Jackendoff 自身は外国語学習の習得方法に絡めて自らの言語観を語ってはいない。しかし、きわめて素朴な観点から外国語学習のプロセスを考慮してみれば、外国語学習とは、母語と学習対象言語間の、語彙から構文にいたるさまざまなレベルでの音韻・統語・概念という3側面のマッチングを習得していくことであり、また外国語学習に伴う困難の要因は、このマッチングが1対1の対応関係にならないという事実にある。このミスマッチは語彙のレベルであれ構文のレベルであれ、両言語間に偏在する。

第二言語の習得過程が母語の習得過程と異なるのは、すでに獲得している母語の音韻・統語・概念構造が介在するという点においてである。しかし、いずれの場合も、言語の獲得とは、語彙から構文にいたる各レベルにおいて、適切に結びついた音韻・統語・概念構造を脳内に構築することである。そのような示唆をJackendoffの言語理論は我々に与えてくれる。

* 本稿は、2007年6月9日に徳島文理大学で開催された日本比較文化学会第29回全国大会での研究発表をもとに加筆・修正したものである。

参考文献

- Chomsky, Noam (1970) "Remarks on Nominalization," R. Jacobs and P. Rosenbaum (eds), *Readings in English Transformational Grammar*, 184-221. Waltham, Mass.: Ginn
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," K Hale and S. Keyser (eds) *The View from Building 20*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press, Oxford.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions--A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1977) *X-bar Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantic and Cognition*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1996) "Conceptual Semantics and Cognitive Linguistics," *Cognitive Linguistics* 7, 93-129.
- Jackendoff, Ray (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (2002) *Foundations of Language*, Oxford University Press, Oxford.
- 中右 実 (2001) 「ジャッケンドフ」 『言語2001・2別冊 言語の20世紀101人』, 210-211, 大修館書店, 東京.
- 田中茂範・武田修一・川出才紀編 (2007) 『エクスプレスEゲイト英和辞典』, ベネッセコーポレーション, 東京
- 文部科学省 中学校学習指導要領 第9節 外国語
URL : http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301c/990301i.htm

